

巻頭言

わかやま子ども学総合研究センタージャーナル 第2号発刊に寄せて



和歌山信愛大学教育学部子ども教育学科
学科長 千森 督子

開学2年目を迎えた令和2年度は、和歌山信愛大学が教育学部としての礎を積み重ねる大切な年でしたが、日本が、世界が新型コロナウイルス感染症の流行という歴史に残る大変な災難に見舞われました。

本学も前期の大半はオンライン授業となりキャンパスから学生の姿が消え、学内はひっそりと静まり返っていました。前期後半にようやく学生の姿が戻り、にぎやかな声が聞こえるようになった時は、学生の存在感をひしひしと感じました。秋には幼稚園実習や教職基礎実習はじめ、子どもに関するボランティア活動も何とか実施できるようになって参りました。

和歌山信愛大学わかやま子ども学総合研究センターは、本学開設と共に未来をつくる子どもの教育・福祉のために、地域と社会の役立ちのために設置されましたが、子どもを取り巻く状況も大変な1年でした。コロナ禍の影響を受け、昨春から休園・休校となり、長期間の自宅滞在による運動不足、生活リズムの崩れや学習の遅れ、友達に会えないこと等によるストレス増大が懸念されました。登学できるようになっても慣れないマスク着用をはじめとした制約づくめの日々です。一方、親も収束の見通しが立たない中、閉塞感と共に子育ての課題も深刻化し、困惑の日々が続いています。

このような状況下、当センターが果たすべき役割は大きく、活動も活発に行われるべき時ですが、本年度はシンポジウムや子どもに関するイベント中止等のコロナ禍の困難な状況が立ちはだかりました。しかし、子ども相談、専門分野の講演、研究、機関誌発行といった活動は工夫を凝らしながら、地域や連携する様々な機関と共に取り組むことができました。ここに今年度の活動成果として、本学教職員や特別研究会員の寄稿による「わかやま子ども学総合研究センタージャーナル第2号」をまとめさせていただきます。

次年度はこれまでの活動成果と課題を踏まえ、より充実した活動、研究が展開できますように研鑽を積んで参りますので、今後ともご協力、ご支援賜れますように宜しくお願い申し上げます。